

チャペルニュース

2015年3月1日

荒野を歩まれるイエス

司祭 バルナバ 関 正勝

イエスは洗礼者ヨハネから受洗され、公の生涯を始められました。ヨハネにとって神の子イエスの洗礼は到底考えることなど出来ない行為でした。それは神に背くという罪を犯さざるを得ないわたしたち人間に求められた「悔い改め」の洗礼だったからです。神の子が「どうして」というヨハネの大きな疑問は当然でした。しかし、このイエスの行動こそがわたしたちと同じ肉をとり、わたしたちと共に肉の現実を生きられる神の姿に他なりません。しかも、この姿にこそ「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」との声が「天から」(父なる神)掛けられています。

わたしたちと同じ肉をもってこの世界を共に歩まれるイエスは、荒野であるこの世界を全身で受け止めて歩まれることになります。イエスが父である神からの「愛する子、心に適う者」との呼びかけを聞いた直後に彼の前に展開している世界は荒野と表現される以外ない世界・神以外の存在が自らを神と僭称して、人々と世界をその配下に治めようとしている世界としてイエスの前に立ち現われてきたのでした。イエスはこの荒野を超越者として何物でもないかの如く泰然とやり過ぎたり、素通りしたり、あるいは滅びよと断罪するのでもなく十字架を負うようにして歩まれます。

このイエスの姿こそが荒野だ！不条理だ！と叫びたくなるわたしたちの日々の現実に希望の光をもたらしてくれます。この十字架は新しいいのちに結びついていることをイエスの復活のゆえにわたしたちは信じるからです。マタイ福音書が伝える誘惑する者の一つ一つの誘惑の言葉はわたしたちにとって切実なものがあります。「石をパンに」の誘惑は、困窮する社会の現実の深刻な問いです。なぜ他の人ではなくてこのわたしが苦しむのか、と不条理とも思える事柄に遭遇して神に激しいまでの問いをぶつけ、ついには「国々とその繁栄」を見せられて「此の道しかない」との声高な喧伝に身を投じかねない自分に気づかされます。

現代の荒野はますます狡猾になった誘惑する者の声とそれに誘われる者の多さによって暗黒で人間の住めない様相の度を深めています。「荒野の40日」と語られる大齋節は別の世界の現実ではなくて、今のわたしたちの世界にほかならないことに思いをいたして歩みたいものです。この荒野を十字架を負って歩まれているイエスを見つめて。